

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720272

研究課題名（和文） 清朝治下の東トルキスタン・オアシスにおける文書行政と支配構造

研究課題名（英文） The Documental Administration and Ruling Structure of the Oasis Towns in Eastern Turkistan under the Qing Dynasty

研究代表者

小沼 孝博（ONUMA TAKAHIRO）

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30509378

研究成果の概要（和文）：本研究は、清朝治下の東トルキスタン・オアシスにおける文書行政について検討し、清朝統治の実態解明に取り組んだ。本研究により収集された文書史料から、現地ムスリム有力者、なかでもハーキム=ベグの地位にあった人物が、オアシス・レベルの行政と外交で主導的役割を果たしていたことが明らかとなった。また、ハーキム=ベグ職にあったムスリム有力者を中心として、清朝権力と中央アジアの在地社会が繋がりを持つ、政治空間が形成されていたことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：This project dealt with documental administrations of the Oasis Towns in Eastern Turkistan under the Qing dynasty in order to clarify the ruling structure. The archival sources collected by this project showed that the local Muslim rulers, especially appointed the post of hakim beg, played a major role in the administration and diplomacy at oasis level. Furthermore, by this system, the political and diplomatic space centered around the hakim beg was firmly maintained in Qing Kashgaria, in which the Qing power had a connection with the local society of Central Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東トルキスタン、清朝、カシュガル、コーカンド、中央アジア、文書行政、ハーキム=ベグ、新疆

### 1. 研究開始当初の背景

ユーラシア大陸中央部に位置する東トルキスタン（中国領中央アジア、現在の中国新疆ウイグル自治区南部）は、18世紀中葉に清朝（1636-1912）により征服され、現地のテュルク系ムスリム住民は、その統治下に組み

込まれることとなった。清朝による征服は、中央アジア世界の一角として固有の歴史世界を有した当地域が政治的な枠組みとして現代中国に包含されるに至る淵源であり、当地域の現状を考える上でも極めて重要な事件である。しかしその一方で当時の清朝統治

の実態や清朝権力が現地社会と関わった局面を細やかに描出する歴史研究は、なお行われていない。

これまで研究代表者は、清朝の統治機構の末端に組み込まれた、ベグと呼ばれる現地ムスリム官員（ベグ官人）の存在に注目し、制度創設に関わる清朝の政策決定過程や政策意図まで踏み込んで検討してきた。しかし、ベク制度のその後の展開や制度運用を通じた清朝権力の浸透過程など、東トルキスタンにおける清朝統治の実態を具体的に解明するためには、王朝レベルの公文書だけでなく、現地の行政に関わるオアシス・レベルの公文書の利用が不可欠である。

## 2. 研究の目的

本研究は、清朝治下の東トルキスタン・オアシスにおける文書行政について体系的に検討し、清朝統治の実態解明に取り組むことを目的とする。具体的には、まずテュルク語（チャガタイ語）や満洲語で記されたオアシス・レベルの公文書を収集・読解し、文書学的な検討と訳註・テキスト化を行うとともに、それら文書が扱う各案件について事例研究を行う。そしてそれら個々の分析作業と検討結果をもとに清代東トルキスタンにおける文書行政の全体像を描き出し、その中で清朝権力と現地オアシス社会がどのように結びついていったのかを検証し、清朝統治の実態とそのもとで成立したオアシスの支配構造について究明する。

## 3. 研究の方法

本研究の研究の基本は海外の文書館における史料調査である。本研究の鍵となる文書史料は全国各地の文書館に分散して所蔵されているので、研究期間の3年間は夏季・冬季の休暇時期を利用して現地に赴き収集活動にあたる。収集後ただちに史料の読解と分析を行い、文書学的検討や事例研究等を通じてデータを集積し、清朝治下の東トルキスタンにおける文書行政、およびそれによって構築・維持されていたオアシスの支配構造を再構成する。研究成果の公表は、主に国内外の学会・研究会における研究報告と、学術論文の執筆という形態をとる。

## 4. 研究成果

本研究では、海外を中心とする調査により、関連する文書史料の収集につとめ、その成果の一部をもとに研究報告と論文執筆をおこなった。ここでは、それら成果の個別の内容を述べるのではなく、主な収集文書の概要を報告することにする。また、後掲の「5. 主な発表論文等」との対応関係も付記する。

### (1) 1760年のコーカンド来文

中国第一歴史档案馆所蔵（北京）。1760年（乾隆25）に、中央アジアのコーカンド=ハーン国の統治者イルダナ=ビィから、ヤルカンド駐留の清朝大臣とエミン=ホージャ（初代トルファン郡王）に宛てられた文書2件。大臣宛文書はテュルク語で起草され、イルダナが、清朝皇帝の勅書と使者が到来したことに対して感謝の意を示し、また今後の友好関係の維持を求めている。この文書からイルダナが清朝皇帝に対して「服従」の意を示すような内容は一切読み取れないが、ヤルカンドで作成されたこの文書の満洲語訳では、清朝への「服従」を示す要素が織り込まれている。一方、エミン=ホージャ宛文書はペルシア語で起草されている。内容も大きく異なり、コーカンドの隊商が新疆へ向かう途上でクルグズに略奪されたことと、コーカンド使節の一員の息子（東トルキスタンに居住）を帰還させて欲しいとの要請が記されている。同じムスリムという点をふまえ、イルダナはエミン=ホージャに具体的な要請を出したと考えられる。清朝大臣は返書において、エミン=ホージャとの「共同統治」体制を指摘し、書簡内容の相違を非難するが、コーカンド政権が大臣とムスリム有力者の双方に書簡を送付し、かつムスリム有力者に具体的な要求を出すという形式は、以後の外交上の慣例となる。（学会発表⑩）

### (2) 1775年のカザフ来文

中国第一歴史档案馆所蔵（北京）。1775年（乾隆40）に、カザフのスルタンであるアブルフェイズが次子ジョチを派遣し、イリ将軍に送致したテュルク語文書2件。一つは、カザフ草原南部におけるクルグズとの衝突防止のため、清側にカルン（警備所）の設置を求めたもの。もう一つは、トルキスタンの支配をめぐるカザフ内部での抗争について、イリ将軍を通じて乾隆帝に裁定を要請したものである。どちらも当時カザフ草原南部で先鋭化していた、カザフとクルグズの対立、あるいはカザフ有力者間の対立の事実を伝えている。これに対して清は、事態の波及をおそれ要請を断り、清の対中央アジア不干渉の原則が確定していく。（雑誌論文⑪）

### (3) 1788年のコーカンド宛勅諭

遼寧省博物館所蔵（瀋陽）。1788年（乾隆53）に清・乾隆帝がコーカンド=ハーン国のナルブタ=ビィに宛てた、満洲語・トド文字・モンゴル語（オイラト語）・テュルク語の三言語合璧の勅書。皇帝専用の黄紙が用いられ、満漢合璧の玉璽も捺されており、便宜的な複写とは思われない体裁を持つ（正式な副本の類と思われる）。現時点において、清から中央アジアの統治者に発送された文書（行文）として現存が確認できるのは、本勅書が唯一

である。テュルク語文面の冒頭において、乾隆帝の言葉が、「神の命」(Khodaning farmani)のもとに発せられていると明記され、また後半部分で、カシュガル=ホージャ家のサリムサクの捕縛と引き渡しをナルブタに求めるという興味深い内容を持つ。(学会発表⑫)

#### (4) 1795年のコーカンド来文

中国第一歴史档案館所蔵(北京)。1795年(乾隆60)にナルボタ=ビィが派遣したカシュガルの清朝大臣とハーキム=ベグ、ヤルカンドのハーキム=ベグに宛てたテュルク語書簡3件。派遣されたムハンマド=シャリーフ使節が帶來した。清朝大臣宛書簡は挨拶文の内容でしかないが、ハーキム=ベグのイस्कンダル(第3代トルファン郡王)宛書簡には、文書現時点において、ヤルカンド在住のムハンマド=シャリーフの家族引き渡しの要求がなされている。イस्कンダルの調査により、ムハンマド=シャリーフが以前は新疆-コーカンド間を往復する貿易商人であったこと、外国商人との「一時的結婚」の風習が東トルキスタンに存在していたことが判明し、当時の社会経済状況を知る上で興味深い内容を持つ。一方、ヤルカンドのハーキム=ベグ宛書簡は、テュルク語で記されているもの、語彙と書体が他の文書と著しく異なっており、清代の東トルキスタンで成立した、独特のスタイルを持つ行政文書と共通点を持つ。この書簡をコーカンド本国で起草されたと考えるのは困難であり、家族送還にかかわるヤルカンド当局との交渉の必要上、カシュガル当局が「捏造」し、準備した文書であると判断される。(学会発表⑩)

#### (5) 1848年のコーカンド来文

国立故宮博物院所蔵(台北)。1848年(道光28)にコーカンドからの使者アブド=アルガフルがカシュガルの清朝大臣とハーキム=ベグに提出したテュルク語書簡2件。前年に発生した「七人のホージャたち」の聖戦の善後策に関連し、コーカンド政権が東トルキスタンにおける既得権益の保証を願う内容を持つ。ただし、語彙と書式から判断して、カシュガル到着後に、清の行政文書の書法に習熟していた者に依頼して起草したと推測される(雑誌論文③・⑥)

#### (6) 1848年のヤークーブ=ベグ書簡

国立故宮博物院所蔵(台北)。1871年(同治10)に、当時すでに東トルキスタンを制圧し、政権を樹立していたヤークーブ=ベグから、清朝皇帝(同治帝)に送付されたテュルク語書簡。本文書は唯一現存が知られている、公式的なヤークーブ=ベグからの清朝宛の書簡であり、また1871年前半におけるヤークーブ=ベグ政権と清朝の交渉という新事実

を伝えるものである。その内容は、「チーン(=清朝皇帝)に対して、ウルムチのトゥンガン(回民)勢力に拘束されていた清朝官員の送致を通達するとともに、清朝の旧領域(新疆)に対する自らの征服と支配の正当性を述べ、それに人智を超越した「神の意志」という理由付けを行っている。ヤークーブ=ベグが、自政権の実効支配が既成事実となっていることを清朝に認知させようという意図が読み取れる。(雑誌論文④)

以上の文書およびその処理過程から指摘できる、清朝治下の東トルキスタンにおける文書行政と支配構造について、予見も含めて述べておく。まず、清朝征服当初は、清朝大臣と現地のムスリム有力者が共同で地域行政にあたる方針も示されていたが、事実上、清朝大臣は軍政担当、ハーキム=ベグを筆頭とするムスリム有力者は民政担当と役割が分化していく。これと同様の文脈の上で、カシュガルのハーキム=ベグが対コーカンド外交の実質的な担当者となっていくことも理解できよう。また、ハーキム=ベグが主導するオアシス統治においては、ハーキム=ベグの個人的な資質や経験だけでなく、確立していたオアシス・レベルの文書行政が十分に機能していた。清代東トルキスタン・オアシスでは、ハーキム=ベグを中心とし、清朝権力と中央アジアの在地社会が繋がりを持つ、政治空間が形成されていたと想定され、このような枠組みの十分に意識した上で様々な問題を捉え直すことは、現地オアシスの実態を構造的に理解する上で有益であると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①小沼孝博、新免康、河原弥生、国立故宮博物院所蔵1848年コーカンド文書再考、東北学院大学論集 歴史と文化、査読無、第49号、2013、pp.1-24.

②Onuma Takahiro、Promoting Power: The Rise of Emin Khwaja on the Eve of the Qing Conquest of Kashgaria、『遊牧世界と農耕世界の接点—アジア史研究の新たな史料と視点—』(『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告書』No.57)、査読無、2012、pp.31-60.

③Shinmen Yasushi and Onuma Takahiro、First Contact between Ya'qub Beg and the Qing: The Diplomatic Correspondence of 1871、『アジア・アフリカ言語文化研究』、査読有、第84号、2012、pp.5-37.

④小沼孝博、新免康、河原弥生、国立故宮博物院所蔵1848年両件浩罕来文再考、輔仁歴

史学報、査読有、第 26 輯、2011、pp.107-138.

⑤Onuma Takahiro、The Development of the Junghars and the Role of Bukharan Merchants、Journal of Central Eurasian Studies、査読無、vol.2、2011、pp. 83-100.

⑥小沼孝博、1770 年代における清-カザフ関係—閉じゆく清朝の西北辺疆—、東洋史研究、査読有、第 69 巻第 2 号、2010、pp.1-34.

[学会発表] (計 12 件)

①Onuma Takahiro、The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors、International Workshop on “Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere、2013 年 3 月 3 日、東洋文庫 (東京都).

②Onuma Takahiro、Encounter between the Qing and the Khoqand in 1759: Central Asia in the Mid-18<sup>th</sup> Century、International Workshop on “Defining the Jecen: The Evolution of the Qing Frontier、2012 年 5 月 26 日、The University of Hong Kong and Hong Kong Baptist University (Hong Kong).

③Onuma Takahiro、The 1795 Khoqand mission and its negotiation with the Qing: Political and diplomatic space of Qing Kashgaria、“Kashgar Revisited”: Workshop to Commemorate the 10<sup>th</sup> Anniversary of the Death of Ambassador Gunnar Jarring、2012 年 5 月 10 日、Nordic Institute of Asian Studies、University of Copenhagen (Denmark).

④ Onuma Takahiro、The “Silk Road Controversy” in Japan、Australian Centre on China in the World Research Theme Workshop: The Past and Present of Inner Asian Studies—towards defining places, nomenclature and approaches、2012 年 3 月 23 日、Australian National University、Canberra (Australia).

⑤小沼孝博、清朝治下カシュガルの政治・外交空間—1795 年のコーカンド使節受け入れを事例に—、平成 23 年度九州史学会大会、2011 年 12 月 11 日、九州大学箱崎キャンパス.

⑥新免康、小沼孝博、台湾故宮博物院所蔵ヤークーブ・ベグ関連文書について、中国ムスリム研究会第 19 回定例会、2011 年 6 月 25 日、早稲田大学早稲田キャンパス.

⑦Onuma Takahiro、Promoting Power: The Rise of Amin Khwaja on the Eve of the Qing Conquest of Kashgaria、2011 AAS/ICAS Joint Conference、2011 年 4 月 3 日、Honolulu: Hawaii Convention Center (U. S. A.).

⑧小沼孝博、17-18 世紀の天山周辺における遊牧民の農耕について、総合地球環境学研究

所プロジェクト 4-5 「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」研究会：「遊牧民と農業」、2010 年 9 月 12 日、総合地球環境学研究所.

⑨小沼孝博、越南漢籍《碩亭遺稿》所収的滿文文字—越南人的“滿学”—、“滿学：歴史与現状”国際研討会、2010 年 8 月 30 日、北京市：北京市社会科学院滿学研究所（中華人民共和国）.

⑩小沼孝博、北京“回子宮”250 年史、清朝滿漢關係史国際學術検討会、2010 年 8 月 28 日、北京市：中国社会科学院近代史研究所（中華人民共和国）.

⑪小沼孝博、台北故宮所蔵兩件浩罕文書簡介、“歴史上的中国新疆与中亞”国際學術研討会、2010 年 8 月 20 日、烏魯木齊（ウルムチ）市：環球賓館（中華人民共和国）.

⑫小沼孝博、故宮博物院所蔵 1848 年兩件浩罕文書再考、第 6 届文化交流史暨方豪教授百年誕辰紀念：先驅・探索與創新国際學術研討會、2010 年 5 月 15 日、台北縣新莊市：天主教輔仁大學（台湾）.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小沼 孝博 (ONUMA TAKAHIRO)  
東北学院大学・文学部・准教授  
研究者番号：30509378

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：